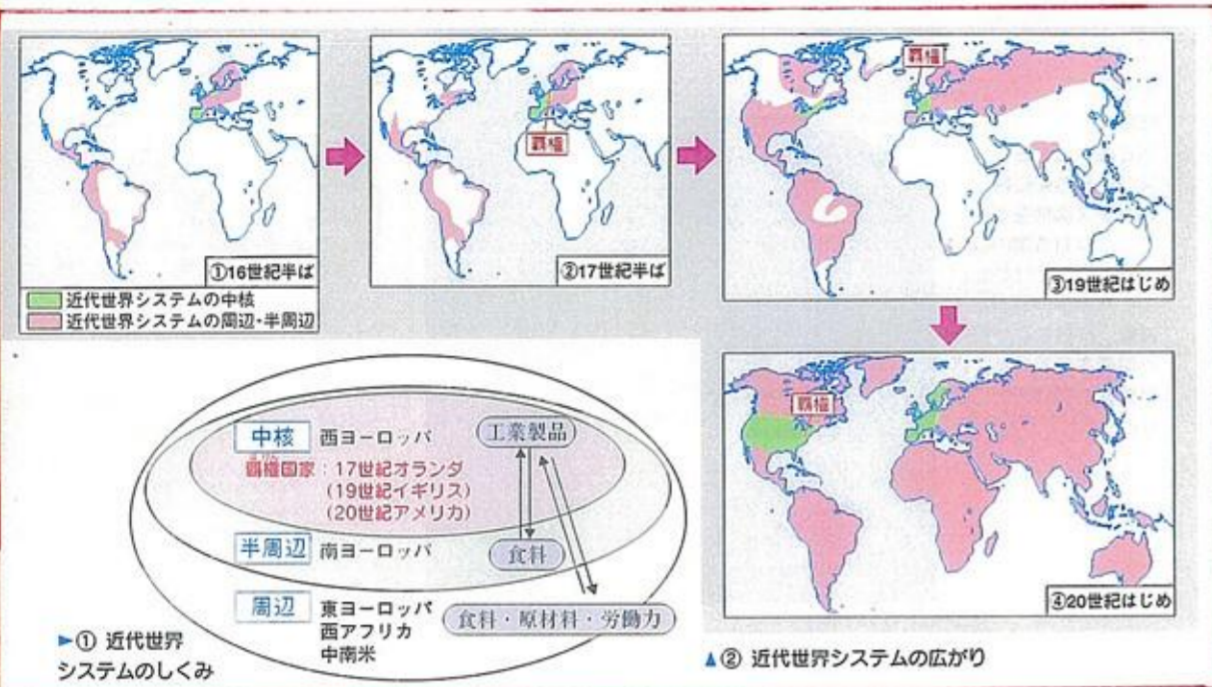


「中核」、「覇権」、「半周辺」、「周辺」の扱い方に図①と図②との間で齟齬があり、近代世界システムを説明する図として理解しがたい図である。

(*関連修正 p.126 本文)

(意見番号 20 番の修正に伴い、修正した図と本文の整合性をもたせるため修正する)



【16世紀 近代世界システムの出現とアジア】

大航海時代のヨーロッパ人の活動を通じて、世界の一体化がはじまった。多くの食物・農産物や動物・病原菌が、「旧大陸」から「新大陸」へ、「新大陸」から「旧大陸」へと海を渡り、人々の暮らしをかえた。これは「コロンブスの交換」とよばれる。大航海時代には病気が戦争も多かったが、日本産や新大陸産の銀の流通などにささえられて、貿易や商業が繁栄を見せ、世界的な貿易なしには庶民の日常生活も成り立たない状況が、世界各地に出現した。

ただし、貿易は各地域を平等に発展させたわけではない。この時代に、毛織物などの手工業製品を輸出した西ヨーロッパと、そこに金銀をもたらしたラテンアメリカ、穀物や造船資材を供給した東ヨーロッパ・バルト海地方の3地域は、相互依存の大規模な分業体制を確立したが、それは通常の交易ネットワークとは違った不平等なしくみだった。

「近代世界システム」とよばれるこの分業体制のなかで、手工業を行い、「中核」となった西ヨーロッパ地域では、近代国家や賃金労働のしくみが成立する。一方、原料や農産物を生産する「周辺」とされた東欧やラテンアメリカでは、国家は弱体化したり消滅したりして、のちの再版農奴制や黒人奴隷制に代表される強制労働が広がった。周辺地域では商品生産の発展が、一種類の作物のみをつくるモノカルチャー

ヤーなどにつながり、「低開発」状態を生み出すのである。今日、南北問題として知られる経済格差は、ここに起源をもつ。

西欧をとり巻く南欧や北欧には、「半周辺」とされる国・地域がみられた。そこでは収穫物を地主と農民が分けあう方法などがとられた。

一方で、17世紀のオランダ、19世紀のイギリス、20世紀後半のアメリカのように、圧倒的な経済力をもつ「覇権国家」が現れた。覇権国家は他国を寄せつけない競争力をもち、自由に取り引きすれば自己の利益は確実なので、自由主義を唱えるようになる。16世紀にアジアに到来したヨーロッパ人は、アジアを征服したわけではなく、アジアの人々の生活にはヨーロッパの品物が絶対に必要というわけでもなかった。むしろヨーロッパ人の役割は、アジアに新大陸の銀や農産物をもたらす、もともと活発だったアジアの貿易をさらに発展させた点にある。

しかし18世紀になると、近代世界システムは、インド洋周辺地域や中東・ロシアを巻き込み、19世紀には地球全体に広がる。そして新たに巻き込まれた地域は、ほとんどが周辺とされてゆく。

(*関連修正 巻頭Ⅲ右段 10 行目, p.124 小見出しリード文, p.133

本文 17 行目)

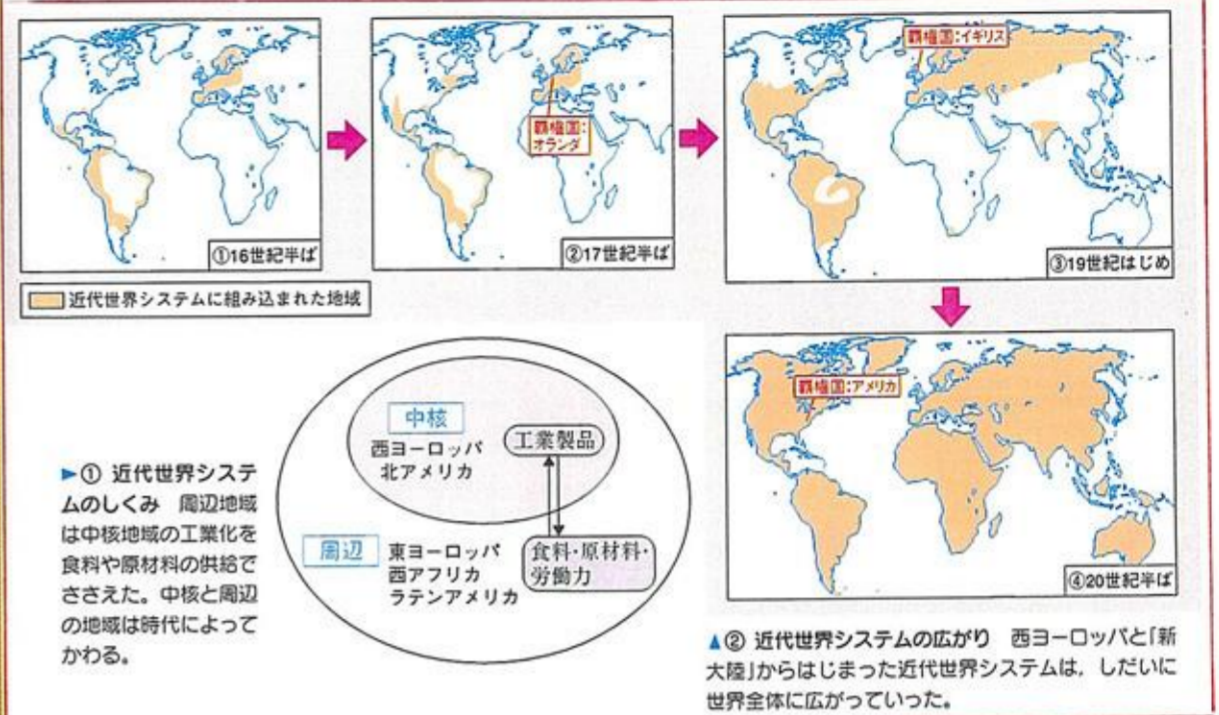
(意見番号 20 番の修正により、「新大陸」「発見」などの用語には「(かぎっこ)」をつけることになった。用語の使用に統一性をもたせるため、修正する。)

アメリカ大陸を発見した

偶然、アメリカ大陸を発

見し、ポルトガルとの間で、

こうして銀は、新大陸のアメリカとヨーロッパ、



【16世紀 近代世界システムの出現】

ヨーロッパによる大航海は、新たに「発見」されたアメリカ大陸をユーラシア大陸に結びつけ、「世界の一体化」がはじまった。この二つの大陸間では、人間のほか、多くの食べ物や動植物はもとより、病原菌までもが往来し、人々の生活をかえた(コロンブスの交換)。日本や「新大陸」で産出した銀などの流通にもささえられて貿易は繁栄し、世界的な貿易なしには、庶民の日常生活も成り立たない状況が各地で見られるようになった。

毛織物などの工業製品を輸出した西ヨーロッパと、そこに銀をもたらしたラテンアメリカ、穀物や造船資材を提供した東ヨーロッパは、相互依存的な大規模な国際分業体制をつくりあげた。この国際分業体制を、「近代世界システム」とよぶ。

しかしこのような分業体制は、各地を平等に発展させたわけではなく、富は「中核」となった西ヨーロッパにかたよっていった。手工業を発展させた「中核」の西ヨーロッパでは、主権国家や賃金労働のしくみが成立した。一方、原材料や食料を提供する「周辺」となった東ヨーロッパやラテンアメリカでは、国家は弱体化して、多くは「中核」諸国の植民地となった。労働の形態も、東ヨーロッパでの再版農奴制やカリブ海のプランテーションでの黒人奴隷制度の

ような強制労働が主流になった。また一種類のもののみをつくるモノカルチャーが広がり、「低開発」の状態が出現した。今日、南北問題として知られる経済格差は、ここに起源をもつ。

一方で、17世紀のオランダ、19世紀のイギリス、20世紀半ばのアメリカのように、圧倒的な経済力をもつ「覇権国家」が現れた。覇権国家は他国を寄せつけない競争力をもち、自由に取り引きすれば自己の利益は確実なので、自由主義を唱えるようになる。

新しい分業体制(近代世界システム)は、ヨーロッパと「新大陸」の間で発生したため、16世紀の段階ではアジアはこれまでと同様に比較的平等なネットワークのなかで、繁栄していた。16世紀にアジアに到来したヨーロッパ人は、アジアを征服したわけではなく、アジアの人々の生活にはヨーロッパの品物が絶対に必要というわけでもなかった。むしろヨーロッパ人の役割は、アジアに「新大陸」の銀や農産物をもたらす、もともと活発だったアジアの貿易をさらに発展させた点にある。

しかし近代世界システムの範囲は18世紀にはさらに広がり、やがてアジアも巻き込まれていくことになる。

アメリカ大陸を「発見」した

偶然、アメリカ大陸を

「発見」し、ポルトガルとの間で、

こうして銀は「新大陸」のアメリカとヨーロッパ、